



## 新たな表現方法との出会い

帝京大学小学校 校長 石井 卓之



月曜朝会は現在、コロナのために2つの学年が体育館に入り、他の学年は教室でZoomにより配信された映像をリアルタイムで見るといった形式で行っています。先月の月曜朝会では、日本橋三井ホールで行われている印象派のモネ、ドガ、ルノワールなどの絵が視界一面に映し出される没入体験型「Immersive Museum(イマーシブ ミュージアム)」

」に行ってきた話をしました。このホールでは高さ6メートル、360度囲まれた大空間に、名作がデジタルで次々と映し出されていました。これまでの美術館は人が動いて作品を見て回る形式で、撮影は原則禁止の場所が多いと思います。三井ホールの会場では、場内にあるクッションや絨毯の上に座ったり寝転がったりしながら映し出される作品を鑑賞します。動くのは人ではなく作品です。撮影も自由にできます。今までにない新しいミュージアム体験となっていました。

コロナ前にフランスのジヴェルニーにある「モネの家と庭園」に行ったことがあります。そこには、モネが晩年を過ごしながら連作「睡蓮」を描いたモチーフとなった池がありました。また、彼が収集した浮世絵のコレクションも飾られていました。

イマーシブミュージアムはモネの睡蓮の風景を、池に浮かべた船に乗りながら（揺れている感覚）、奥に描かれている橋に近づいていく（視点の移動）、時に絵の具の塗り重ねを感じる（筆のタッチが視覚化）、などリアルな世界では鑑賞できない絵画の世界を表現していました。

チームラボの世界観もそうですが、今、図工の授業では「ビスケット」というソフトを活用してデジタルアートを作成しています。今年度の展覧会では子どもたちが制作した作品を、今までとは異なる形でお見せできると思います。リアルな作品、デジタルな作品、どちらも違ってどちらも素晴らしい表現方法です。その選択と融合をしていくのが、これからの子どもたちです。

学校でも、3年生以上はタブレット端末に慣れ、様々な活用の仕方を工夫しています。GIGAスクール前の2015年調査（文科省）では、1分間に入力できる文字数の平均は小学校5年生が5.9文字、中学校2年生が17.4文字でした。2022年の調査では小5が49文字、中2が60文字となりました。本校の4年生には120文字を入力できる子もいます。デジタル教科書を使うのか紙の教科書を使うのか、紙のノートでまとめるのかデジタルノートにまとめるのか、これからはデジタルを道具としてどのように自分らしく使い分けるのかという自己決定が重要となります。そこには試行錯誤があるはずで、今までのような単線型の学びではなく、複線型でしかも時には戻って異なる方法で再度解決を進める場合もあります。

変化の多いこの時代を自分らしく、しかも生き生きと過ごせる子どもたちになってほしいと願っています。